

# 浜松に生きる日系ブラジル人・ペルー人高校生による ミューラル・プロジェクト

NPO法人 浜松NPOネットワークセンター(N-Pocket)

## サマリー

ミューラルとは、コミュニティの「困難」「問題」や「希望」「誇り」などのメッセージを込めて、地域の人びとと共に公共空間に絵を描く、市民による表現芸術のことです。9人の日系ブラジル人・ペルー人高校生たちが、困難を克服して学ぶ外国人高校生の存在を、同じ境遇の子どもたちや浜松の市民に伝えようと巨大な壁画づくりに取り組み、多文化共生のまちづくりに大きな一歩を踏み出しました。



## 移住労働者の子どもたちが抱える課題

静岡県浜松市の人口は60万人、その約4%、2万3千人が外国人移住労働者とその家族です（注：この数字は2005年4月の旧・浜松市のもの）。その8割が日系ブラジル人と日系ペルー人です。

今の日本の制度では、外国籍の子どもは義務教育の対象とはならないこともあり、不就学の児童が浜松市内だけで相当数いると推計されています。彼らは学校に通うためのお金がなかったり、言葉が壁となって授業についていけなかったり、さまざまな理由で勉強を継続できず中学校でドロップアウトするなど、高校への進学率は極めて低いのが現状です。結果として工場労働者の職を得ること

外に、将来の夢を広げるチャンスが奪われているのです。

「このままでは貧困の再生産を繰り返すだけ。外国人も勉強すれば将来が開けるのだと、壁に悩む子どもたちを励ます“当事者のロールモデル”が必要だ」。浜松NPOネットワークセンター（通称N-Pocket）の代表、山口祐子さんはそう考えていました。

## ミューラル・プロジェクトとの出会い

山口さんは米国のNPOとの交流事業を通じて、チャイナタウンなどのマイノリティの問題に取り組む「ミューラル」という交流手法に出会いました。

ミューラルは、地域の歴史や文化、課

題や思いを共有し、人びとを勇気づけ、かづけていく手段として中南米や米国各地に広がっています。「言葉ではなく絵を使ったコミュニケーション、アートが持つポジティブな力は、多文化共生のテーマにこそふさわしい！」。山口さんはそう直感し、浜松に暮らす日系ブラジル人・ペルー人の高校生たちと、このミューラルを突破口にして、若者のリーダーを育てようとプロジェクトを起こしました。

そして、市内の高校を一軒一軒訪問し、校長先生の理解を得ることから始め、日系ブラジル人・ペルー人高校生の参加者を集めました。さらに、県立浜松江之島高校の美術の先生と美術部部員の協力を得て、この活動は2003年春にスタートしました。忙しい高校の先生方に趣旨を理解していただき協力を得るには、とにかく訪問してしっかり説明するという正攻法でした。

## 壁画の作成プロセスが コミュニケーションの場に

集まった高校生たちがまず受けたのは表現トレーニングで、導入として「演劇ワークショップ」を2回実施しました。体を動かしたり、「将来の夢」という絵を貼り紙で創作したり、「仲良くなること」「表現すること」を体験しました。これによって、最初に「ミューラルってよくわからないけど、行けば仲間がいて楽しい」というよいイメージが定着したようです。

次のステップでは、それぞれのライフストーリーを調査し直してお互いに交換



## 関わった人たち

- 参加した日系南米人の高校生たち（ミューラルの主人公）
- N-Pocket（ミューラルの企画・コーディネーター）
- 日米コミュニティエクステンジ、日本財団、静岡県国際交流協会（助成）
- American Friends Service Committee（AFSC）（協働団体、米国のNGO）
- ミューラル・アーティスト ケンダル・オウ氏（注：AFSCのスタッフ）
- 県立浜松江之島高校 美術科主任 鈴木先生（美術の専門家として）
- 同美術部部員（美術を学ぶ同世代のサポーターとして）
- 静岡文化芸術大学（コミュニティ・ペインティング・デイの場、作品発表の場を提供）
- ベンてる他、画材提供企業5社
- その他、コミュニティ・ペインティング・デイ参加者、作品展示に協力した方々など



しました。どうやって日本に来て、どんな困難があったか、それをどう克服したか、これからの夢や進路の希望についてなど、絵に盛り込む共通のメッセージをまとめていきました。

夏にはサンフランシスコを訪れ、商店街や小学校の壁に描かれたミュージラルを見学、ミュージラル・アーティストのケンダル・オウさんから制作方法や表現方法などを学びました。表現したいことをポーズで表し、写真を撮って絵のモチーフにし、壁画全体の下絵をつくっていきます。下絵づくりの作業からは日本人の美術専攻科の生徒たちも大活躍でした。

ミニチュアの壁画が完成したら、次は高さ3m・幅11mの板に拡大して描画、そしてペインティング。巨大な壁画に使う画材は、外国人生徒たちで「こういうメッセージを絵に描くので、画材をください」と寄せ書きした手紙を企業に送り、5社から協賛を得たそうです。

また、静岡文化芸術大学と浜松江之島高校で3日間、コミュニティ・ペインティ

ング・デイを開催、子どもから大人まで、延べ160名の人が壁画のペインティングに参加しました。中には外国人の不登校の子どもの姿もありました。

いろいろな人が「一緒に色を塗る」という時間は、さまざまなコミュニケーションを生み出します。多くの人が、日系の高校生たちとはじめて話し、その境遇を知り、彼らが抱えている悩みや希望に気づくことができました。

そしてようやく完成。祖国での、家族との思い出に始まり、乗り越えた困難と、彼らの希望＝「あきらめないで」「今が学ぶとき」「あなたは一人じゃない」「夢に向かって」というメッセージが見事に表現されました。

作品は静岡文化芸術大学の学園祭や浜松駅前、そして国体イベントの背景としても活躍し国立民族学博物館にも展示され、多くの浜松市民の目に彼らのメッセージは焼きついたことでしょう。



## ミュージラル・プロジェクトから生まれたもの

ミュージラルは参加した学生たちに“リーダーとしての自覚”と“共に行動を起こす仲間”をもたらしました。

山城口ベルトさんは現在大学生。このプロジェクトの参加者4名と共に外国籍の高校生や学生たちのサークル“AJLAN”（日系南米わかもの協会）を立ち上げました。「母国語教室をやりたい」「進学相談会をやりたい」など具体的なアイデアを、N-Pocketのサポートを得て一つずつ実現しつつあります。

例えば、外国人の子どもと保護者のた

めの高校進学ガイダンスの開催。「学ぶことは未来のために」、そんなメッセージが徐々に伝わり、ガイダンスの参加者は3年間で300名を超えました。

一方、3カ月間彼らと絵画づくりの時間を共にした美術科の高校生たちは、同世代の抱えている困難を理解しながら絵に表現していくという経験を通し、お互いを尊重しながら意見を出し合うこと、深く議論することができるようになったと言います。また視野が広がり、何名かは映像や伝統文化の分野に進むことを決めたようです。

### 関わった人たちの声

#### ● 山城口ベルトさん

(浜松大学 国際経済学部)  
私たちはたくさんの人の力でミュージラルという体験ができました。私も周りの人を助けられるようになりました。



私たちと同じ困難を繰り返さないために、私たちが始めなくては、と思っています。

#### ● 県立浜松江之島高校 美術部の生徒

浜松には外国人がたくさんいますが、ふだん接する機会が少ないので、どうして彼らが浜松にいるのか、どんなことを感じ、考えているのか、よくわかりませんでした。ミュージラルに関わってそれを知ることができました。また、言葉の壁など多くの困難を乗り越えて、前向きにがんばっている彼らの思いを知って、かえって自分が励まされました。

#### ● 県立浜松江之島高校 美術科主任 鈴木先生

多くの時間を割く必要があり学校の枠を崩さないといけないこと、海外の手法が日本でも成功するかどうか実験的な取り組みであったことから、引き受けるまで一週間悩みました。でも生半可な関わりではできないことをやり遂げた生徒たちの成長を見て、挑戦の大切さを学びました。学校としてどう取り組んでいくかはまだまだ未消化ですが、今度同様の呼びかけがあったら、また引き受けたいと思います。

#### N-Pocket (NPO法人 浜松NPOネットワークセンター)

地域が抱える課題を、当事者（子ども・障がいのある人・在住外国人・高齢者など）と共に事業化して、多様な市民が参加できる活動スタイルを展開するNPO。

● <http://www.n-pocket.jp/>